

いつくしみとあわれみ

～慈悲～

2016 シンポジウム記録

日本カトリック司教協議会 諸宗教部門

目次

はじめに

1

開会あいさつ

5

第一部 発題

三橋 健(神道)

佐竹 通(真宗大谷派)

中川 博道(カトリック)

23 17 7

第二部 対談 質疑応答「会場からの質問を受けて」

34

閉会あいさつ

52

パネリスト紹介

54

はじめに

インドにおけるキリスト教の歴史は、イエス・キリストの使徒、聖トマスの時代にまで遡ると言われていますが、中にはその歴史は聖トマスともう一人の使徒バルトロマイの二人によってカヴァーされたという人たちもいます。さらにキリスト教の歴史は、シリアやペルシャの初期キリスト教コミュニティのメンバーであった若干のキリスト教徒によって、インドに広がっていったのだと主張する人たちもいるのです。しかしながら、そのような説は別として、実はキリスト教もまた他の宗教と同様、浮沈を重ねながらインドの地で生き長らえた末に、主としてヨーロッパ人の到来を機にインド国内で地歩を固めることに成功したのです。

インドにおけるキリスト教の中心人物は、スペインのカトリック神父で、カトリック・イエズス会メンバーのフランシスコ・ザビエルです。彼は一五四二年にゴアの地に着いたのでした。彼を中心とする人たちの努力で、キリスト教はインドの地で地歩を固めるに成功しましたが、キリスト教とインドの他の宗教グループたちとの対話はまだ始まらなかったのです。インドのキリスト教コミュニティとヒンドゥー教コミュニティは、ほとんど接触のないままに過ぎて、何か関係があったとしても、それは主として非宗教的な事柄に限られていました。しかしこの時、神のあつぱれな使徒で悟りを開いた神秘主義者であるラーマクリシュナ・パラマハンサと、その弟子ヴィヴェーカーナンダが舞台に登場し、彼らがキリスト教とヒンドゥー教の調和のとれた関係への強力な起爆剤となったのです。ラーマクリシュナの比類のなさは、その有名なイエス・キリスト体験にあります。これは、世界中のキリスト教徒とヒンドゥー教徒を等しく驚かせ、彼らにヒンドゥーの宗教の古くからの教理と霊性について、いま一度研究してみようと思わせたのでした。この二人の傑出した聖者による貢献が、世界規模での神学分野で特別の位置を占めているのは確かです。

しかしながら、十九世紀のインドの歴史を分析したらわかるように、二人の成功は、また同時に、いくらカラージャ・ラームモハン・ロイを中心とする東インドはベンガル州出身の若干の学者や思想家たちのより早いころの努力に負うものでもありました。確かにラーマクリシュナとヴィヴェーカーナンダは、わたしたちに神に至る素晴らしい道を示してくれましたが、それでも二人の仕事は多くの点でわたしたちによりによる一貫した努力をもちきりと示しているのです。ロイはこの二人の人物を突き動かしたのと同じ精神の下で、インドの多くの宗教グループ間に調和のとれた雰囲気を生み出そうと苦闘したのでした。

ロイはキリスト教の宣教師が自分たちの宗教以外の宗教を一切拒絶しているのは、すでにその点においてイエス・キリストの教えに背いているのではないかと主張したのでした。彼はキリストの教えが正しく理解されたならば、人々が、『ヴェーダ』や『ウパニシャッド』に見られる教えと衝突したりすることは決してないはずだと心から信じていたのです。

一八九三年九月十一日から十二日にかけてシカゴで行われた「万国宗教会議」が、一つのランドマークとなったことが理解されています。それは西洋世界のキリスト教徒たちに、それまで知られていなかった宗教的世界観が提示されたからでした。それはこの会議が彼らの心に東洋の宗教的伝統に対する強烈な興味を目覚めさせ、それまで愚かしい迷信にすぎないとしてずっと見過ごされてきたものが、実は靈性と叡智の大海であることを彼らに気付かせたからです。次の引用は、スワミー・ヴィヴェーカーナンダが「万国宗教会議」において、宗教間の調和ということを訴えて述べた情熱的な言葉です。

「もしもこの万国宗教会議が、世界に何ほどのことを示したとしたら、それは次の事柄です。すなわち、聖性と純粹性と慈悲は世界のどんな教会の専有物でもないこと、また、どんなシステムもこの上もなく気高い性格の男女を生み出したのだということ、これです。この明らかな証拠を前に、それが誰であれ、自分の宗教のみの存続を夢見て、他の宗教の破壊を夢見る人がいたら、私はその人を心の底から憐れんでどんな宗教の旗印にも『戦いではなく、援助を。破壊ではなく、

同化を。紛争ではなく、平和を』という言葉が、抵抗を制して記される日は近いはずだと、私は指摘してやるでしょう」。(スワミー・ヴィヴェーカーナンダの万国宗教会議の演説)

スワミー・ヴィヴェーカーナンダと彼の先駆者ラージャ・ラム・モーハン・ロイの個人的な努力のおかげで、西洋のキリスト教徒たちはヒンドゥー教の古代の教説に新鮮なまなざしを振り向けるようになりました。一般のヒンドゥー教徒たちも、キリスト教の教えを見直すようになり、ヒンドゥーの人たちとキリスト教徒たちの間に存在してきた互いの恐怖心は、ゆつくりと消え始めていきました。そして、これまでの恐怖心が、互に相手から学ぼうとする真剣な願いに取って代わったのです。一九九八年、アジアのローマ・カトリック司教たちが集まり、三月十三日に世界に向けて一つのメッセージを布告しました。この司教たちは広くアジアの人々に挨拶を送り、アジアの宗教の偉大な伝統への敬意を宣言したのです。そのメッセージは、次のとおりです。

「私たちは、他の宗教的伝統に信頼を寄せているアジアにおける私たちの兄弟姉妹の全員に、敬意をもって挨拶いたします。私たちは、ヒンドゥー教、仏教、ユダヤ教、イスラム教など、偉大な宗教の霊的な価値を認めることを喜びとします。私たちはアジアの偉大な哲学者たちの教えに見出される習慣や実践の倫理的な価値を、つまり先祖たちへの自然な追善や敬虔な献身を推し進める習慣や実践の倫理的な価値を評価いたします。私たちはまた、一切の創造物を敬愛することで、創造主への身近な思いを表明しているアジアの土着の部族民の信仰や慣例をも尊敬いたします。

私たちは、自分たちの豊かさを分かち合う点で、そしてまた自分たちの様々な違いを互いに尊敬しあう点で、アジアの諸国民全てと共に成長していきたいと願っています。わたしたちは自分たちの国民の生活の質を向上させるために、協力し合おうと決意しています。わたしたちは自分たちの信仰こそが自分たちの宝だと考え、それを万人とそれぞれの宗教的信念や自由を十分に尊敬しながら、

分かち合うことが出来たらと願っているのです。」（アジアのカトリック司教会議のメッセージ）

この声明からも見て取れるように、今ではキリスト教が非キリスト教的宗教に対してよりポジティブな態度をとるようになったために、キリスト教と非キリスト教の関係は以前に比べて大幅に変化しています。ローマ教皇フランシスコは、最近の演説で次のような意見を表明しました。

「あなた方の多くはカトリック教会には属してはいないうえに、あなた方の中には無神論者もおられるので、私は秘かに心の底であなた方の一人ひとりに祝福を捧げます。私はあなた方のどなたの心をも同じように尊敬しておりますが、私はまた、あなた方のどなたも、やはり神の子であることを承知しているのです。」

教皇フランシスコのこれらの言葉は、世界の様々な宗教間の関係が、引き続き改善されていくだろうという希望を、わたしたちに与えてくれるのです。

いつくしみとあわれみ（や慈悲）は全ての宗教とつながりがあり、どの宗教の専売特許でもありません。しかし各宗教がそれをどういう風に理解するかということを知る価値があります。次からのページでは中川博道師がいつくしみとあわれみのことをカトリック教会の見方から説明され、三橋健師が神道、そして佐竹通師が真宗大谷派の立場から説明されました。このような対話によって諸宗教の総合的な理解がよりよくなるようにわたしは祈りたいと思います。

日本カトリック司教協議会 諸宗教部門

委員 シリル・ヴェリヤト

開会あいさつ

岡田 武夫（諸宗教部門責任司教）

日本カトリック司教協議会諸宗教部門の担当をしております、岡田と申します。今日はこの金沢の教会をお借りして、諸先生にご指導いただき、ご一緒に勉強したいと存じます。

カトリック教会では、昨年十二月八日の「無原罪の聖マリア」の祭日から今年の十一月二十日の「王であるキリスト」の祭日まで、この一年を「いつくしみの特別聖年」としております。それは教皇フランシスコのご意向によります。わたしたちカトリック信者はいつくしみとすることをより深く知り、そして行うとすることを心がけております。キリスト教の教えの中心に「いつくしみ」ということがあります。それはキリスト教だけではなく、恐らくどの宗教にもいつくしみ、あるいはあわれみとすることが大切にされていると思います。日本語における「いつくしみ」と「あわれみ」という言葉は微妙に違うと思いますが、その辺のことをどう受け取ったらよいのかということも学ぶ機会が大切であります。それと、日本という文化、風土において、いつくしみ、あわれむということはどういうことか。また今の社会において、このいつくしみ、あわれみとすることをどの様にとらえているのか。一、二、三日前のことですが、日本は自死―自殺ですね、毎年三万人を超えていたんですけれども、二、三年前には未遂者、そして自殺しようかと考えた事がある人等を合わせますと大変な人数になるそうです。真剣に自殺を考えたことのある人は四人に一人という、驚くべき数字が報道されておりました。労り合い、助け合い、支え合って生きていくのが我々のあるべき姿であります。どうしてそういうことになってしまうのでしょうか。キリスト教もそうですけれども、仏教や神道、その他の宗教で「いつくしむ」ということをどのようにとらえ、どのよ

うに実行しようとしておられるかということも分かち合い、今日はここに来て本当によかったなと思っただけですように、心から願っております。

今日この機会を与えてくださった、金沢教会の神父様、信徒の皆様にご心より御礼を申し上げます。どうぞよろしく願います。

チプリアノ・ボンタッキョ（カトリック金沢教会主任司祭）

皆様こんにちは。主任司祭のチプリアノです。この度、諸宗教部門シンポジウムの会場としてこの金沢教会を選んでくださったことを、本当に光栄に思っております。ありがとうございます。わたしもいろいろ勉強させていただきたいと心から願っております。どうぞよろしく願います。

第一部 発題

三橋 健（神道）

冒頭から私事で恐縮ですが、この金沢の地はわたしの生まれ故郷であります。わたしは七十七年前に金沢市二俣町の園田家の次男として生まれました。本家の園田家は加賀奉書を藩に納めた紙漉農家であり、肝煎役をつとめた旧家と聞いております。その旧園田家の住宅は、国の重要有形民俗文化財に指定されており、現在は湯涌江戸村に保管されています。わたしの生家は本家のすぐ隣にありましたので、子どもの頃は毎日のように遊びに行きました。楽しかったのは炉端で祖母から昔話を聴くことでした。わたしは、昨日、金沢に來まして、江戸村の旧園田家を訪れ、あの頃のままの炉端に座り、とても懐かしく思いました。

さて、本日のシンポジウムのテーマは「いつくしみとあわれみ（慈悲）——諸宗教における日本人の心——」であります。これに関してわたしは神道の立場から話すことになっております。

最初にサブタイトルとして掲げてあります「日本人の心」から述べさせていただきます。話をできるだけ具体的にと思しますので、わたしの魂の遍歴を披瀝し、そのことを通して、日本人であるわたしの心、中でも「宗教心」について説明いたします。

そこで再び私事にわたりますが、わたしの生まれた二俣の話から始めます。二俣は市内から東方へ車で十分ほど走ったところ、富山県境にある医王山の麓の小さな集落ですが、加賀一向一揆の拠点となったところで、真宗大谷派の松扉山本泉寺は全国的に知られております。さらに本泉寺を有名にしたのは、浄土真宗本願寺中興の祖・蓮如が、二俣の地を訪れ、滞在したからであります。今も本泉寺では蓮如忌（「れ

んによさん」をはじめ、蓮如ゆかりの品々が多く遺されています。「れんによさん」になると、どの家も蓮如さんが大好きだった「草だんご」を作ります。わが家でも母が早く起きて作ってくれたものです。あの「草だんご」のヨモギの香りはいつまでも忘れることがありません。

そのようなことで、二俣はほとんどの家が門徒もんたです。浄土真宗では信者のことを門徒といえます。わが家も門徒であり、中でも母は熱心な信者でした。いつも「ナムアミダブ、ナムアミダブ」とお念仏を唱えていました。また、枕もとには曾我量深そがりょうじんや暁烏敏あけがらすずめといった高僧の御本がありました。母は学歴もなく、書物を読んでいるところを見たことはありませんが、母にとっては、あのような御本を枕もとに置いておくだけで安心だったようです。

子どもの頃の母の影響は大きく、わたしは小学四年のとき「正信偈しょうしんげ」を唱えていました。そのようなわたしが神道系の大学に入り、神職の資格を取得し、神道の家に婿入りいたしました。それにより名字も園田から三橋へと変わりました。

わたしの浄土真宗から神道への改宗は、キリシタンでいう「転ぶ」に近い心境でありました。一般に「転ぶ」を「棄教」「背教」などと解していますが、子どもの頃に植え付けられた宗教心は、そう簡単に消えるものでなく、「七転び八起き」と言われますように、いつまた門徒として起き上がるかもしれません（笑）。また、わたしはカトリック信者ではありませんが、教会のミサにあずかると気持ちが悪く落ち着きます。それは三十代の頃からのことです。昭和四十六（一九七一）年、わたしはポルトガルのコインブラ大学に留学いたしました。かの地には神社や寺院がありませんので、日曜ごとにカトリック教会を訪れ、ミサにあずかったものでした。そのようなわたしを口の悪い友人は「お前は隠れキリシタンか」とも言いました（笑）。わたしの魂の遍歴を述べはじめますと切りがありませんので、これくらいにいたしますが、要するに神道は諸宗教に対してとても寛容なところがあります。神道に限らず、一般的に日本人は宗教に対して寛容であると思います。日本は宗教の博物館と言われますように、様々な宗教があります。諸宗教を並存させ

る何かがあるのだと思います。先ほどわたしが生まれた二俣は熱心な門徒が多いと言いました。しかしながら、村には医王山神社と白山神社の二つの神社があり、それらの祭りは熱心な門徒たちが行っておりす。

カトリック教会のことはよくわかりませんが、重要なミサにわたしのような異教徒をお招きくださいました。そこでカトリック教会も柔軟で寛容的な宗教だと実感いたしました。そのような態度は、十六世紀末から十七世紀の初め、日本を訪れたイタリアの宣教師アレックスサンドロ・ヴァリニャーノにも見られます。ヴァリニャーノは日本で布教するにあたり、日本の風俗習慣に合わせた柔軟な態度をとりました。また一九六二年から六五年にかけて開かれた第二バチカン公会議の他宗教に関する宣言文にも、カトリック教会は「諸宗教の中に見出される真実で尊いものを何もしりぞけない」とあります。

ところが、日本人の宗教に対する寛容性を疑問に思う見解もあります。それは寛容の精神などでなく、信仰心が希薄で、節操がなく、いい加減だからであるとの厳しい批判であります。しかし、いささか自己弁護になりますが、わたしは宗教に対する柔軟性・寛容性は信仰心の豊かさを示すものと思っています。

時間が限られていますので、次に本日の主題の一つ「いつくしみ」の説明に入ります。その前にわたしの結論のようなことを述べますと、このような諸宗教の対話は宗教の対立を超えるために必要不可欠であり、そこで大切なのは、互いの対話の根底に「慈しみの心」がなければならぬということです。世界には様々な民族があり、それぞれに宗教があり、思想も異なります。物の見方、考え方、信ずる対象も違うのですから、互いにつつかることになります。それをいかにして乗り越えていくか、そこで絶対に必要なのが、本日のテーマである「慈しみの心」であると思います。

どのようなやり方で「いつくしみ」の本質を把握しようとしているのか、いわば方法論を簡単に述べさせていただきます。

わたしは大学で日本文学を専攻したこともあり、物事を考えるにあたり、常に言葉を大切にしたり、やり方を選びました。とくに古代から現代に至るまで使われてきた言葉は重要であり、日本人の心、思想、文化、宗教などを理解するための根本資料となるものです。だから「いつくしみ」とはどのようなことかを知るにあたり、この言葉の根源を明らかにし、その成立を知り、次に意味や内容を尋ねるといふ方法、つまり徹底的に言葉にこだわるというやり方です。端的に言えば、日本語を明らかにすることによって、日本を知るといふ方法です。

このような方法は有名な国語学者・大野晋博士の影響によるものです。大野博士は一つの言葉を極めるにあたり、意味・内容はもとより、発音なども厳密に考証されておられます。さらに言語学にとどまらず、宗教学、歴史学、文化人類学、神話学、民俗学なども活用され、徹底的に検証していくという行き方なのであり、わたしにはとても真似ができませんが、大野博士のひそみに倣って「いつくしみ」といふ語の本质を尋ねてみたいと思います。

最初に文法的な説明をいたしますと、「いつくしみ」は「いつくしむ」という他動詞マ行五段の連用形が名詞化した語です。それは「祭り」が「祭る」の連用形の名詞化した語であるのと同じことです。このように連用形はしばしば名詞化いたします。だから「いつくしみ」は「いつくしむこと」という意味になります。

その「いつくしみ」に漢字を当てると「齋しみ」となり、これは重要な神道用語の一つであります。その意味は「神のご威光を恐れ敬い、心身を清めて一心不乱に神明に奉仕すること」であります。このような人間の神への「齋しみ」があり、神は人間を「慈しまれる」のです。つまり人間の「齋しみ」と神の「慈しみ」とは正比例の関係にあります。つまり人間の「齋しみ」が増せば、神の「慈しみ」も増すのであります。これを現在では「敬愛」といふ言葉で説明しています。「敬」は人間が神を「敬う」ことであり、「愛」は神が人間を「愛しむ」ことで、これが敬愛の精神であります。「敬」と「愛」は表記を異にします

が、二にして一という関係にあります。

十四世紀中頃に成立した神社の縁起を集めた『神道集』「北野天神の事」に「神も自ら貴からず、人の敬ひを以て貴しとす、人はまた自ら安からず、神の助に依りて安治してり」とあります。神は人間が敬うから尊いのであります。一方、人間が心配ごともなく、安らかな生活を送ることができるのは、神の助けがあるからだと言っております。

このように神は人間が敬うことにより大明神にもなりますが、もし敬わなかったならば、零落して妖怪になるというのが神道の神観念です。例えば、水神さまを熱心に敬うと水天宮という大きな神社になりますが、敬わないでほったらかしにしておくと水天狗すなわち河童という妖怪に零落いたします。日本の妖怪の多くが神の零落した姿であるといっても過言でないでしょう。

さて、話を再び「齋しみ」に戻しますと、十二世紀から十四世紀に伊勢神宮の外宮で展開した伊勢神道でも「齋しみ」を重視いたしました。だから神明奉仕で最も肝要なのは「清浄」と「正直」だと説いていきます。平たく言えば、清き正しき心で神を敬えば、神は必ず愛愍を納受され慈悲を垂れるということです。この精神は、現在も神社本庁が宣揚する「敬神生活の綱領」の「明きまことを以て祭祀にいそしむこと」などに継承されております。

神道語としての「齋しみ」は、これくらいにして、次に「いつくしむ」とはどのような意味なのか、その中身を探ねてみたいと思います。古くは「慈愛する」と意味があります。十一世紀末から十二世紀初めに成立した『類聚名義抄』という辞書があります。わが国で最古の漢和辞書ですが、そこには「慈、ウツクシビ」と見えます。このことから「いつくしむ」を古くは「うつくしむ」と言ったことがわかります。この「うつくし」は親が子どもをかわいく思って愛すること、肉親の情を表した言葉です。

一例を挙げると、『崇神紀』四十八年正月十日の条に、天皇が豊城命と活目尊の二人の皇子に「汝等二子、慈愛共に齊し」とおっしゃっています。これは「二人の皇子はとも同じようにかわいく思う」

という意味です。このように「慈愛」を「うつくしび」と読んでいます。

また「年号を神護景雲と改めたまふときの宣命」に「天は万物を能く覆ひ養ひ賜ひ、慈び愍み賜ふ物に坐す」〔続日本紀〕巻第廿八、称徳天皇とあります。これは天つ神は万物をおおい養い、慈しみ愛でられるとの意味で、ここでも「慈び愍み」という語が用いられています。

このように古くは「慈」を「うつくしび」と読んでいましたが、十五世紀になると「いつくしむ」と読むようになります。例えば、一四七四年に成立したとされる『節用集』という国語辞書には「慈」を「イツクシミ」と読んであり、この時代には「いつくしみ」は「慈愛」の意味に用いられております。さらに後になると、「いつくしみ」という語は「大切に可愛がって育てる」という意味になります。「慈愛」という意味に変化していきます。大野晋編『古典基礎語辞典』（二〇一一年、角川学芸出版）の「いつくし・む【慈む】」の項にも「本来齋戒・奉仕する意であつたイツク（齋く）が、中古以降、大切に養育する意に転じ、この単語とウツクシムの慈愛の意味とが混合して、中世に至ってイツクシムという語が生じた」と説明してあります。そのようなことで、本日、話題にしています「いつくしみ」という語は「うつくしみ」と「いつく」とが混合して室町時代、すなわち十四世紀中頃から十六世紀に成立した語であることとなります。

それでは室町時代に成立した「いつくしみ」とは、どのような内容のことを言うのでしょうか。とても大きく重い語ですので、一言で決めつけるのは、むしろ避けるべきであります。肝心なところは「神がご自分を犠牲にして人間を愛されること」、あるいは「親が自分を忘れてわが子を愛すること」であり、いずれも大切なものは、それが無条件の愛であるということです。

このような「愛」はキリスト教でいう「神の愛（アガペー）」すなわち人間に対する神の自発的、無条件的絶対愛を意味しており、本日のテーマである「いつくしみ」もそのように理解してよろしいのではないのでしょうか。

仏教では「代受苦」「大悲代受苦」あるいは「慈悲」という語があります。仏・菩薩がわたしたち人間の苦しみを代わりに納受されることで、とくにお地藏さんは他人の苦しみを代わりに受けられる菩薩として有名です。

このような「代受苦」の神々は神道にもおられます。ただし「代受苦」は仏教語ですので、これを神道語で言えば「祓え」が適当かと思えます。その代表的なのは祓戸四柱の神々であります。これらの神々は「大祓詞」という古代から今に至るまで唱え続けてきた祝詞のりとに登場いたします。お名前を掲げますと瀬織津比売・速開都比売・氣吹戸主・速佐須良比売であり、これらはわたしたちの犯した、また犯すであろう様々な罪をご自分が犯したものと背負われ、祓え清めてくださるありがたい神たちです。

ところで、ここに問題となるのは「愛」という言葉です。「いつくしみ」という語が成立した室町時代のわが国では「愛」という言葉の持つイメージは好ましい内容でありませんでした。愛欲・愛執・愛着・愛撫などが示すように、これらは地位の高い者が低い者をわが物のように可愛がることです。例えば、最初の愛欲は仏教語ですが、これには執着した欲情であり、悟りを妨げるものと考えられました。

ご存知のように、一五四九年にイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが来日して、わが国へ初めてキリスト教が伝えられます。先ほども説明したように、この頃に「いつくしみ」という語は成立いたしました。ただ、宣教師たちは日本人に「デウスの愛」をわかってもらいたいと苦労いたしました。そして熟慮の末、これを「御大切」と訳しました。これは現在からみてもとても素晴らしい訳であると思います。

そのような例証をバチカン図書館に所蔵するキリシタン版の国字本『どちりなきりしたん』から挙げてみることにします。その前に補説しておきたいのは、現存する国字本『どちりなきりしたん』は二本あり、ほかに「Doctrina Christiana」と題するローマ字本が二本あることです。書名からもおわかりのように、これらはキリスト教の教義書であります。また、バチカン図書館本は一五九一年に島原半島の加津佐で刊行されたと言われています。わたしは一九九七年にローマの教皇庁立グレゴリアン大学で「日本神道」の特

別講義をする機会を与えられました。その合間を縫って、ピタウ学長から推薦書をいただきバチカン図書館を訪れ、この国字本『どちりなきりしたん』を親しく閲覧いたしました。そのとき、——これはわたしの直感ですが、——子どもの頃にしばしば母が見せてくれた御文のことが思い出されました。両書の文字や印刷が似ていたことも原因の一つです。御文は蓮如が門徒に与えた浄土真宗の教義であり、国字本『どちりなきりしたん』はキリシタンにとって重要な教義書です。

さらに憶測になりますが、国字本『どちりなきりしたん』が出版された頃、このカトリック金沢教会の聖堂のステンドグラスに描かれている高山右近は、この加賀金沢にいました。キリシタンの必読書であるこの国字本『どちりなきりしたん』を高山右近は必ず読んだと思います。ここ加賀金沢は浄土真宗の熱心な門徒の多い地です。両者の間に互いに影響があったと考えられますが、これについては深入りしないことにいたします。

さっそくバチカン図書館本に「御大切」という語を尋ねてみますと、第六に「まづ我等に對せられての御大切の深く、はなはだしきほどを知らしめ玉ふを以て、どうすを御大切に存ずる事も深、らんが為也」とあります。ここにいう「御大切」は「キリストの愛」を意味する言葉です。ちなみに夫婦の愛の場合は「夫婦たがひに深き大切に結び合ひ」(第十一)と単に「大切」と記してあります。

言うまでもなく、「愛する」という語は当時も使われておりました。ただ、前述したように、「愛」は心を惑わせ、善悪をわきまえないみだらな欲望であると理解されておりました。そのことは同じ『どちりなきりしたん』第二に、弟子が「悪癖は何事ぞ」と問うたのに対し、師が「心中におこるみだりなる望み也。是則心をくらまして、悪を見知らぬ様にする者也。其と云は、身の深き望みと、頼もしきと、愛すると、憎むと、悦びと、悲しみと、恐れと、怒りなどの事也」と答えていることです。

このように「愛する」には、秩序を混乱させる欲望、人々を惑わせる心、悪を分別できない心、そのような意味が含まれているのです。また、ローマ字本の「Doctrina Christan」には、難しい言葉を平易に言

い直した「和らげ」が付されており、そこに「愛する」を「モテアソブコト。可愛がる」と説明してあります。つまり「愛する」には、「心の慰みとして愛する」「好き勝手に扱う」「楽しむかのように思いのままに操る」などという、自己本位なところが見られ、当時は悪い意味に用いられていたのです。

わたしは二〇一四年三月に亡くなられた井上洋治神父と親交がありました。神父は「風の家」を創設され、機関誌『風』を贈ってくださいました。また、作家の遠藤周作さんにもご紹介いただき、遠藤さんが立ち上げた日本キリスト教芸術センターの会員として「スサノオノミコトの犯した罪」という話をいたしたこともあります。

井上神父も遠藤さんも、日本の人たちに「キリストの愛」を伝えるため、どのような日本語がよいだろうか、日本人の心に響く訳語はないかと悩んでおられました。そのような神父が「慈悲」は仏教語であるので「慈愛」ではどうだろうと意見を求められたことがあります。恐らく神父は罪深い人間に対する神の愛であるアガペーを「愛」というよりも「悲愛」と訳する方が日本人にとって適切だと考えていたようです。これらは仏教語の「慈悲」「大悲」などにヒントがあったと思いますが、井上神父の場合は「共に悲しむ」という意味を強調したかったように思いました。

他国の言語を翻訳することは、とても難しい問題です。それは国内においても同じで、古語を現代語に訳す場合、中でも「愛」「いつくしみ」「あわれみ」などは微妙な問題を含んでいますので、慎重になる必要があります。日本には言霊信仰と言葉に魂が宿っており、発した言葉とおりの結果を実現すると言われてきました。ですから、一步間違えると、様々な誤解を生む原因にもなります。

実は、神々の「いつくしみ」には、もう一つの考え方があります。それは神の「御稜威」に起源するとの説です。この「御稜威」の「御」は「稜威」を尊んだ語であり、「稜威」は神がお持ちになつて「威力」のことです。この「稜威」に「くしむ」がついてきたのが「いつくしむ」という日本語だということです。なお、「くしむ」の「くし」は「不思議な」という意味であります。だから「いつくしむ」

は「御稜威くしむ」という神道語が本来の意味で、現代語に訳せば「神のお持ちになつてゐる不思議な強い力」となります。しかし、これに関しては詳しく述べる時間がありません。また、もう一つの「あわれみ（慈悲）」についても説明できませんでした。後で質疑応答の時にでもお話できればと思います。ひとまず、終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



今回この金沢でシンポジウムを開かれるにあたり、仏教側で禅宗もあれば真言宗も天台宗もあるんですが、真宗寺院が多いというところからか、図らずもわたくしのところに矢が当たりまして、お話をさせていただくことになりました。

この会がどこに狙いがあるのかよくわかりませんが、お互いのことをあまり知らないから知り合いましようというようなことかなと思ひ、レジュメを作ったのですが、今日ここへ来まして、いろいろな先生方とお会いしてお話してみますと、むしろ諸宗教の違いを通して、この現代という時代をわたくしたちが「いつくしみ」とか「あわれみ」という言葉がありましたけれども、どういう形で人間が共に生きていく世界を歩んでいけるのか、そのことが主要の課題なんだなと思ひましたので、あまりレジュメに従わないでお話したいと思ひます。

「いつくしみとあわれみ」というのが今日のテーマですが、仏教では「慈悲」ですね。「慈悲」というのはインドから伝わった言葉でして、「慈」はインド語の *maitri*。 *mira* というのは友達、深い友達、友達の愛という意味で、友達を愛おしむことです。「悲」は *karuna* という梵語。梵語というのは、お釈迦様のお言葉をお釈迦様が亡くなった後に、どうして間違ひなく喋られたことを後の人に伝えるかということ、考え作り出した言葉です。その梵語でお経を書いて残したものです。この *karuna* は「悲」にあたる。「悲」とは呻くというような意味がありまして、悲しいという字は三本の横棒が両方にあり、真ん中に二本の線がある。つまり、引き裂かれる心、心が痛んでいる。何とかしてあげたいんだけどどうにもならない、これが「悲」という心です。実は仏様の心というのは「慈悲」なんです。友達を思う気持ち、何とかしてあげたいな、手を差し伸べてあげたいなという心。それから、とても黙って見ておれない、なんとか手を

差し伸べたいという「悲」ですね、中国では両方に分かれるんですが、「慈」を「拔苦ばつく」、「悲」を「与楽よらく」、また反対に他の学者は「悲」が「拔苦」で「慈」が「与楽」だという反対の見解が出てくるのですけど…。いずれにしても、前におる人を見捨てておけないという「いつくしみ」の心、そしてその悲しみに同ずる心というのが「慈悲」です。

梵語が中国に入って漢字で音訳されるんですが、例えば、仏教で言いますとインドでブツダとは「悟った人」という意味ですね。中国に入って漢字になると、なんと「浮図」ないしは「浮屠」と書きました。これが中国に出てくる初めてのブツダという言葉です。ですから、どう発音しても「フトウ」となり、漢字に表したのが「浮図」や「浮屠」となり、それが後に今の「仏陀」という漢字になったわけです。これは「悟った人」という意味ですね。

阿弥陀さん (Amitābha) というのは、*am* は否定文、*itā* は「限り」という意味ですので、「無量な」、「限りがない」という意味になる。何が限りがないかと言えば、「慈悲」の限りがない、愛する心に限りがない。あるいは、わたしたちに与える仏の光が人間の闇を照らすということが、仏の光―無量光や無辺光、と表現する。つまり、人間の闇を照らす光と人間の苦しみに同じでそれをなんとかしようとする働き、「慈悲」と知恵の光には限りがないというのが阿弥陀さんです。

あまり細かいことを言うとは違ひを見つけるのが難しいのですが、先ほどの神道からの話に「正直」という言葉が出てきましたけれども、実は知恵、慈悲に誠であろうとすればするほど、実は人間がそうは至らない存在であるということにぶつかるとは思われます。例えば、具体的なことでは、熊本の地震や水害が度々襲ってくる、あるいは岩手県、あるいは数日前からの北海道というような、こういうときにですね、全国からボランティアが行きます。今日、田舎はどこもそうでしょうけど高齢化しているんですね。年寄りがあるとか町を守って生きているんですが、そこで手に負えない地震や水害が起きて、家が流され、どうしよう

もない、仮設住宅に入っても五年で出ていかなければならぬとしたらこの先どうなる、死んだ方がましだというのが圧倒的に多い被害を受けた人々の心です。どうしようもない、死んだ方がましだと。でもそこに届くのは、はるか遠くから一銭も貰わずに来てくれるボランティアです。泥を運び、家を片付けるんですよ。そして「また休みができたから来るからね、おばあちゃん元気でやってよ」と言う。どうですかこの心、この言葉。それはもう死んだ方がましだという人にとつたら、まさに光ですよ。

ですから、慈悲というのは具体的には、人と人との命を繋ぐ心なんです。これはいつも言うんですが、闇というのは「門」に「音」です。「門」に「光」ではないんです。門は開くか閉じるかのどちらかです。閉じたら鍵を掛けたようになるし、開いたら鳥居みたいになりますでしょ。門構えは開いた門と、夜になって閉まる門。つまり、闇という字は閉じた門です。何を閉じたかというところ「光」を閉じているのではないんです。「音」を閉じているんです。お経の中には音という字がしきりに出てきますでしょ。音という字を日本語に直しますと「おと」とは訳しません、「こえ」と訳します。小学校三年の漢字で、音は①おと、②こえ、とありますので、音は「こえ」と読むんですけど、恐らく、現在ここにおられる人の中にも「音」という字を「こえ」と発音する人はあまりいないと思います。ほとんど「おと」になってしまっている。でも意味は「こえ」なんです。つまり、声が閉ざされた世界が闇なんです。つまり人間の命に届いてくるのは声、その人に届く声なんです。つまり、人間がどうにもならぬという形で喘いでいる、その人間に呼びかける声が人間の命を開いていった。それが「いつくしみ」であり「慈悲」であるんです。つまり、慈悲とは如来からの声なんです。

ですから親鸞さんは仏教でもですね、お釈迦様が言われた通りに誠実に、純粹に、正直に、努力して頑張る、それは当たり前です。でも、正直になろうと思っても正直になれない。例えば、ボランティアでも何回もボランティアに行っている人は「何回した?」「お前らはボランティアに行つたらんだらう」という気持ちが起こることもある。また、ボランティアを志願する大学生は「就職活動のときの内申書に

ボランティアの回数が多ければ有利な印象になるだろう、だからこのあたりで一週、岩手でもボランティアにでも行っておこうか」とそういう気持ちも過ることもあるんです。一生懸命ボランティアをしても、「あいつは何にもしとらん。わしは何回も行つとる」となる。つまり、どこまで正直であろうとも、どこまで純粹であろうとしても、人間は必ず自分の名利心に溺れる。そういうものをすべて切り捨てられるものなのか。実は、どこまでいっても落ち込んでいくような心を持っているようです。

レジュメに「是非知らず邪正もわかぬこの身なり 小慈小悲もなければ名利に人師をこのむなり」(『正像末和讃』帖末)と紹介しました。人に先生と呼ばれればいい気になりますよ、本当に内心をみればどこにいても自己中心のままです。ではそういうのは仏の教えから切り捨てられるのか。実はそこまで自分を守り切れない、自分を通しきれない、落ちぶれていく歪んだ心の中に生きている。その人をいかにして救うかということが如来なんです。そういうことが中心になってきたのが浄土教です。ですから、浄土教は「小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもうまじ 如来の願船いまさずは 苦海をいかでかわたるべき」(『正像末和讃』帖末)——本当にわたしたちの現実を表向きに例えていると、いいことをしなければならぬとわかってはいるけれど小慈小悲を持ち合わせていない。でも、その人を真実のうちに歩ませようと働きかけるのが如来なんです。それが親鸞聖人によれば、「如来の作願をたずぬれば 苦悩の有情をすてずして」(『正像末和讃』37)——仏の願いってというのはなんで起こされたのか。それから、苦悩の有情は、自分の苦労の中に陥るのはダメなんだよと、実は苦悩をも救わんと戦ったのが如来の願い、如来の回向です。

如来の回向というのは仏教の働きかけのこと。「回向」とは回し向けること。昔の人は仏様の働きと云ったんです。仏様の働きとは何かというと、例えば、なんかいいことをしなければと思うんだけど、少しときを過ぎれば違うことを考える。実はそんな自分にも、如来大慈はいつでもあなたのために呼びかけ

ていてくださるのです。ですから、昔の人は仏様と出会うことを「如来の呼び声に出会う」と言うんです。呼び声といっても幽霊などではないですよ。念仏。実は如来がわたくしをいつでも促してくださっているのです、わたくしに帰るところがあるのだと自分に帰りつくのです。

今日、あつという間に家族が離れ、年寄りも年寄り、若い者は若い者だけの生活になっている。今まで北陸放送で大ヒットした仏壇屋のコマーシャルで、仏さんにおばあちゃんが手を合わせてお参りしている。後ろに孫が二人座っているんだけどおばあちゃんのお参りが長いから、おばあちゃんがお参りしている間にこっそり二人が抜け出すのを、おばあちゃんは気配でわかっていて、ニコッと笑って、「いつ分かる日がくる」と言うのです。二代に渡って俳優は変わりましたが、大ヒットしたコマーシャルでしたが、ちょうど去年の今頃からなくなりました。つまり、あのコマーシャルはコマーシャルの意味を為さない、つまり同居している家庭が圧倒的に少なくなっているということです。

今、東北や熊本、北海道などで地震や災害にあつた人々は、なんとか周りからの励ましはあるにしろ、死んだ方がましだ…いろいろな気にかけてくれる子どもたちは東京にいるんだけど、それでも、それでもしよつちゅう来るわけではない。頼らなければよかつたと思ふことがある。まさに、やがて老いては死に至るんだ…と。こういう形で希望を失っている。命のつながりを失っている。

先ほど、開会のあいさつで岡田大司様がおっしゃいましたけれども、ニュースでは二十代の四人に一人が自殺を考えている。一年間に五十三万人の人が現代の自殺未遂者。今の日本で、分離化された家族の中で、高齢者は高齢者でどう生きていったらよいか夢もない。生きる願いがわからない。そしてわかるのは、若者方で、これからどうなっていくのか、これからどうしていけばいいのかという中で、四人に一人が死んだ方がましという気持ちになる。つまり、命がすり減っている。二〇二〇年に東京オリンピックなんて言っていますけれども、だんだん心が冷え込んでいくのです。先ほど話していましたが、昭和

五十年頃に大学闘争があり、そして「あさま山荘事件」が起こった後一気に、これではだめだ、この理屈だけではだめだ、なんとか人間のつながりや優しさをといて、歌謡曲やフォークソングでも「やさしさ」という言葉が溢れ、「やさしさ」世代になっていったんですね。わたしの記憶では遠藤周作さんの大ヒットした作品もそうです。まさにそれは慈悲の世界を表現されていると思います。

今もこうして、カトリック教会では慈悲をテーマにして諸宗教と共に現代の日本にとって何が大事かを考えていかなければならんと思っています。いつくしみとあわれみ、まさにそれはわたしたちの命が何に心を寄せて生きるのかということ、仏教で言えば「慈悲」、「いつくしみ」と「あわれみ」という単語を見ると、仏教では「いつくしみ」も「あわれみ」も上から目線というような言葉で、弱い者を助けてあげるというニュアンスで捉えられるので、「いつくしみ」や「あわれみ」という言葉はなるべく使わないで、「慈悲」という漢字にするみたいなんです。つまり、人間の命の拠り所、というよりは如来の気持ちに立ちながら、どうにもならんとき詰っている者に手を差し伸べる、声をかける、そのことが今の日本にとっていかに大事なのか、わたしたち一人ひとりが如来の慈悲に、如来の呼びかけによって立ち上がるということが人間のテーマといわれているのが、恐らく今日の開催の主旨の意味であると思います。

諸宗教の違いは…と申し、仏教界の考えをお話ししましたが、人と人との命が今呼びかけあって、助け合って、声かけあって、一昔は朝七時になるとみんな玄関を開けながら、「今日はいいい天気になったね」「さわやかな朝だね」と言ってお話をかけ合ってたんですが、今日は田舎でも隣の人と一週間顔を合わせない。田舎でもそういう人が増えているんです。つまり、人間の命と命が触れ合わなくなっている。そこには、人に語りかければ迷惑になるだろうという形で、若い人たちも語り合わない。でも、声をかけられ、または声をかけることによって、人間が立ち上がっていく世界が必ずわたしたちの命にあるんだということを、「慈悲」や呼びかけに込めることを通してお話ししました。

今、お二人の先生方のお話を伺いながら、改めてわたしも仏教の家庭に生まれ、高校生くらいまでは毎朝お仏壇に水とご飯をお供えして祈っていたこと、また、神棚の前で拍手を打っていたことを思い巡らしておりました。わたしは学生時代にキリスト教に出会って受洗しました。しかし、キリスト教世界の教えやその言葉使い考え方など、耳慣れない言葉の意味を理解しようとすることに精一杯で、自分が生まれ育つた元の世界に何があったのかを問うゆとりのないまま、数十年を過ごしてきました。

しかし、今、お二人の先生のお話を伺いながら、自分がキリスト教世界で探し求めてきたことが、実は自分が出てきたと思っていた世界が探し続けていることと深いつながりの中にあることに、改めて驚いているところです。こうした場と呼んでいただいで、自分のルーツも含めて自分の今までを振り返るありがたい機会をいただきましたことに感謝しております。

1. 『いつくしみの特別聖年』を祝うカトリック教会の思い

わたしがカトリック教会に入信した時代は第二バチカン公会議後数年の時代で、この公会議の教えの意味を教会全体が具体的に探り続けていた時代でした。わたし自身のカトリック信者としての生活は、教会と共に改めてキリストの教えの中心的な意味を探す歩みであったように思います。

そして、第二バチカン公会議閉幕五十周年記念として、カトリック教会は二〇一五年十二月から「いつくしみの特別聖年」を祝い始めました。

二〇一五年は、わたしにとっては個人的にも注目していた年でした。ちょうど十年前、わたしは自分の修道会の在り方や、教会の在り方について、これからのヴィジョンをどのように持ち、どのように現状を整理していくべきかを思い巡らさなければならぬ、そんな立場にありました。二十一世紀を迎えて、カ

ルメル修道会は、一丸となって「聖テレジアと十字架の聖ヨハネと共に歩む『本質的なものからの再出発』」という表号をかかけ歩んでいたときでした。修道会の中にも様々な混乱や陰りが見えていることを認識しながら、その頃、神学院時代の恩師の教理神学担当の司祭を訪ねては相談させていただいておりました。そんなある日、その司祭が突然、会話の中でこう言いました。「中川さん、教会はあと十年間は落ち込みますよ。いろんなものが崩れていきます。しかし、教会の長い歴史を見ると、何回もこうした経験をしてきました。特に大きな公会議の後にはそうしたことが起こります。教会の教理や理念を根本的に見直し、教会の在り方を根本から捉え直して、新しい理念に従って生きようとするプロセスの中で、組織の在り方、規範、教会の生き方そのものが見直されていきますから、それまでの在り方が崩れていきます。そして、組織的・構造的に必ず落ち込んでいく経験を教会はしてきました。しかし、その中から教会は大きく飛躍してきたのです。ですから、今、教会の本質は何かをしつかり問い続けていかなければ、様々なものが崩れ去ってどん底に行きついたとき、何も残らない事になります」と。そのとき以来、「あと十年は落ち込む」として、「教会の本質を問い続けながら深めてく」と言われた言葉は、とても深く心に残りました。そして、去年がちょうど十年目でした。

一九六二年、カトリック教会は、教会史上初めて、地球上のほぼ全域から二四〇〇名余の司教たちが参集した最大級の公会議を開催し、三年の年月をかけて、二〇〇〇年近い教会の歴史を振り返り、キリストとの出会いを見つめなおし、神ご自身、主イエスご自身、そして教会そのものの抜本的な見直しをし、二十一世紀に向かっつての方向性を検討しました。それを「第二バチカン公会議公文書」としてまとめました。二〇一三年に司教団は、改訳再版しましたが、今読み返しますと、改めて教会が二十一世紀の激動を見つめながら、教会のアイデンティティーとその使命を根本的に探り続けていたことに驚きを覚えます。神学院でもその教えを中心に学びましたが、その当時、教会がどのような世界を見つめて、何を言わんとして

いるのがよくわかっていなかったことに今更、気づかされます。

公会議後五十年間、歴代の教皇たちは、この理念をさらに分析して理解を深め、様々な教会公文書を通してその意味を明らかにし、現代教会が問われていることを見つめなおし、改革を行ってきました。そして、公会議閉幕五十年を経て、その歩みの結論のように、また今、新しい二十一世紀を歩む出発点のように「いつくしみの特別聖年」が定められ祝っているのだと思います。

「いつくしみの特別聖年」のラテン語オリジナルサブタイトルは、*Misericordiae Vultus*、です。*Misericordiae* ミゼリコルデイエは「あわれみの」、「いつくしみの」と訳されてきました。今両先生のお話を伺いながら、今回のテーマにあらわされているように「慈悲」という言葉に通じるものであることを改めて思います。*miser*とは「みじめな、どうしようもない、病んでいる、傷んでいる」*cordia*は「心」という意味です。ミゼリコルデイアという言葉を通して「みじめでどうしようもない人間にそれでも心を通わせつづけようとなさる神の本質」が見えてきます。

また *Vultus* ヴルトゥス は「顔」という意味です。「ミゼリコルデイエ ヴルトゥス」は、「あわれみ、いつくしみ（慈悲）の顔」を意味します。「顔」は出会いの窓口ですから、「どうしようもない、病んでいる、みじめな人間に、どこまでも心を寄せてくださり、出会おうとなさる神との出会い」が今年の中心的なテーマであることが浮き出てきます。わたしたちがどんなにみじめな状態のときにも、わたしたちを思いやって、心を寄せていてくださるお方にもう一度出会い直すこと。わたしたちもこの御顔を探しながら、神のいつくしみ・慈悲を生きようとすることです。

2. 「いつくしみのみ顔」を探して

「いつくしみの特別聖年」が始まって、わたし自身は「いつくしみのみ顔」にどのように向き合って生

きてきたのかを振り返させられました。

二〇〇〇年に教皇聖ヨハネ・パウロ二世は、古来から「白衣の主日」と親しまれてきた復活節第二主日を「神のいつくしみの主日」へと変更しました。「白衣の主日」は、洗礼のときまとった白衣を、その後一週間儀式の中で着用して八日目それを脱ぐ記念の主日でした。これを西暦二〇〇〇年の復活祭に「神のいつくしみの主日」に切り替えられました。これは長い歴史の中の大きな転換でした。この主日を祝う象徴的な「いつくしみの御絵」はこの日に祝別され、世界中に回りました。皆さんもご覧になったことがあると思います。縦長の暗い背景の中で、主イエスが立ってわたしたちを見つめ、その胸元からピンクとブルーの光が出ている御絵です。この御絵のイエスの足元には「イエスよ、私はあなたを信じます」と書いてあります。

わたしは二〇〇二年に、自分が派遣された修道院の廊下にかけてあったこの御絵に出会いました。縦が一メートル近くある優れた模写でした。わたしはその修道院に六年住んでいましたが、なぜかこの御絵に違和感のようなものを感じてしつくり受け止められず、その前を通るときにはいつもそれを見ないで過していました。六年が経って、新しい派遣の準備のためにローマに一時滞在することになりました。ある朝早く、滞在先の修道院からバチカンに向かっていたとき、それまで立ち寄ったことのない教会の前を通りかかりました。バチカンが管轄するバジリカで、沢山の巡礼者が集まっていました。何かあるのかと、とにかく中に入るとそこに友人の神父もいて、「あれは前の方にあるよ」とわたしを促しました。何かあるのかもわからないまま、聖堂の前方に行ってみると、わたしが六年間ずっと目を背けて見ないようにしていたあの「いつくしみのイエス」のオリジナルの大きな御絵があったのです。驚きました。それだけではなく、その御絵を教皇聖ヨハネ・パウロ二世が祝別した記念日の大理石の碑が壁に埋め込まれていて、大聖年に出会った二〇〇〇年の復活祭はわたしの誕生日でした。わたしはそのとき、神様から優しく頭をコツンとやられたように感じ「この絵に向き合いなさい」と言われたように思いました。今から思うと、

生まれたときからわたしはずっと神のいつくしみに支えられて生きてきたことの確認でした。

ローマから帰るとき、沢山のいつくしみの御絵を買って、とにかく、帰国してきてから皆さんにお配りしました。自分でも関連の本を読んだり調べたりして、人々に話しはじめました。すると、いつくしみのチャプレットなど関連の情報が数多く集まってきて、「いつくしみのイエスの前にいる自分」というものを意識せざるを得ないことになりました。もう八年前のことですが、その見直しは人生の見直しの一つの起点になったと思います。

まず、最初に考えたことは、なぜわたしはあの「神のいつくしみの顔」を避けて生きてきたのかということでした。素直に考えてみると、自分が誰かにあわれまれるとか、どうしようもない自分のみじめな姿にいつくしみ深く寄り添ってもらおうということは、基本的にわたしにとっては受け入れがたいものでした。物心ついた子ども時代から、「きちんとしなさい」、「一生懸命勉強して人の役に立つ人になりなさい」、「人に迷惑をかけてはいけません」等々と薫陶されながら生きてきた自分がいます。わたしたちは恐らくそういう教育を受けながら、人からあわれまれるような、みじめな生き方をしてはいけないというような価値観を担って生きてきたところがあると思います。

こうした社会全体の価値観の中でがんばって努力して、きちんとして、人からあわれまれるというより、むしろ人をあわれむことのできる、人をお世話できるような人になりなさいというのが、わたしたちが受けてきた基本的な教育の方針だったように思います。それは、ともすると能力主義的な人の養成と評価、生産第一主義、経済発展を最優先にした世界や日本社会のひずみとなって現れ「その結果、家族のきずなは希薄になり、家庭は空洞化し、教育の現場はすさみ、…能力があるかないか、役に立つか立たないかで人間を評価」(二十一世紀への司教団メッセージ『いのちへのまなざし』(二〇〇一年二月二十七日)、序文)する社会を生み出す要因にもなってきました。

3. イエスに従う者の生涯の課題

聖書を読んでいて驚くのは、イエスがご自分をパンと葡萄酒として人類に差し出した最後の晩餐の席上で、その直後に、「また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった」(ルカ22・24)とあることです。これに対して「しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である」(ルカ22・27)とイエスは言葉を残します。この問題は繰り返し取り上げられます(マタイ18・1-5、20・20-28、マルコ9・33-37、10・35-45、ルカ9・46-48参照)。イエスに従って生きようとする弟子たちにおいても、自分が優れていることを自分で証明し、この世で抜きん出た者となろうとすることは克服したいテーマだったことがうかがえます。カルロ・M・マルティニーは、人間のゆがみ(罪)の「根源をたどると、愛されること、愛されるに任ずることを拒むところにあります。自分を偶像とするまでに自立にこだわることです」(カルロ・M・マルティニー『パウロの信仰告白』66項参照)と言っています。この「自立」へのこだわりは、「自分で自分を救え」と十字架上のイエスに投げかけられた究極の誘惑でもあるのです。これはわたしたちの人生においても、恐らく最後まで担っていくことであるとあります。自分で自分を救う。人に迷惑をかけない。しかし、裏返しには、つい人を裁いてしまう自分があります。

4. 「時のしるし」としての「靈性」

二十一世紀を迎えた直後、教皇聖ヨハネ・パウロ二世は、使徒的書簡『新千年期の初めに』において、「今日の人々は今日の信仰者に、たとえ意識的にでなくても、キリストについて『語ってほしい』だけでなく、ある意味でキリストに『会いたい』と願っている」ことを指摘し、その第二章「観想すべきみ顔」を通して、わたしたちを「イエスのみ顔の観想」へと招きました。また、同書簡において、「多方面で世俗化が進んでいるにもかかわらず、世の中に靈性の要求が普及していることは、今日見られる『時のしるし』です」(教

皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年紀の初めに』(33)と言われて、キリストとの出会いがいまこそ求められていることを明言しました。

しかし、人類は、どこか神のみ顔を避けて生きてしまうゆがみを抱えています。「創世記」三章において、「その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか。』彼は答えた。『あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから』(創世記3:8-10)」と記されているように、いつの頃からか、人は神を恐れ、自分が裸で傷つけられることを恐れて、主なる神の「顔」を避け、日常生活に埋没するように隠れて生きる悲しさを身に着けてしまいました。

しかし、今改めて、教会は、その「み顔」は、本質的に「いつくしみ Misericordia」そのものであることを宣言します。

5. 二十一世紀、新たに主のみ顔を探すよう呼びかける教会

教皇フランシスコは勅書の中で、「わたしたちは長い間、いつくしみの道を示し、それを生きることが忘れていたかもしれません。一方では、ただ正義のみを要求したいという欲求が、正義は第一歩であり必要不可欠ではあるものの、教会はより高くもつと意味のある目標に達するためにさらに進む必要があることを忘れさせていました」(勅書10)と指摘しながら、教皇聖ヨハネ・パウロ二世の言葉を長く引用しています。

教皇聖ヨハネ・パウロ二世は「現代文化においては、いつくしみが忘れ去られていることを指摘しました。『現代の人の考え方は、もしかすると過去の人々よりもいつくしみの神に反対しているようですし、あわれみという考えを生活から除外し人の心から取り除く傾向に事実傾いているように思われます。』あわれ

み』のことばと観念は人に居心地悪い気持ちをもたせるようです。人間は史上かつてないほどの科学と技術の巨大な進歩によって地上の支配者となってこれを征服しました（創世記1・28参照）。このような地上の支配は時に一面的に軽く理解され、あわれみの余地を残さないかのように見えます。……ですから、教会と世界の置かれている状況の中で、生きた信仰の感覚に導かれた多くの人や多くの集団は、ごく自然にといってよいと思いますが、神のいつくしみへと向かっているのです』。

聖ヨハネ・パウロ二世は、現代世界においていつくしみについての告知とあかしが緊急に必要であることを次のように説明しました。『それは多くの現代人が直観するところによると巨大な危険にさらされている人間と、すべて人間的なものへの愛から命じられていることです。……キリストの秘義、それが回勅『人間のあがない主』の中でわたしが強調したく思った人間の尊厳ですが、同時に今度は、同じキリストの秘義のうちに表されたいつくしみ深い神の愛としていつくしみを宣言させられます。キリストの秘義は、教会と世界の歴史のこの困難な危うい時期に西暦二千年代に入ろうとするとき、同じいつくしみに救いを求め、請い求めるように招いています』。教皇（聖ヨハネ・パウロ二世）のこの教えは、これまで以上に時宜にかない、この聖年に改めて受け止める価値があります。今一度そのことばを受け止めましょう。『教会はいつくしみの信仰を告白し宣言するときに真の生活を生きています。これこそ創造主としてもあがない主としても、もつとも驚嘆すべき属性です。救い主のいつくしみの泉を委託され、配る役割をもたされて、救い主のいつくしみの泉へと人々を近づげるときに、真の生活を生きています』（勅書II）。

6. 聖書のライトモチーフ…「脱出に同伴するいつくしみの神」

そもそも、聖書世界のライトモチーフである『出エジプト記』において、人間の問題性の象徴である世界（エジプト）から脱出して、「乳と蜜の流れる豊かな地」へ導こうとする主なる神は、ご自分のわたしたちへのかかわりの本質を「わたしはある」（出エジプト記3・14）と告げられ、どのようなことがあつ



(資料) 国連人口基金 東京事務所 HPより

でも見捨てることなくわたしたち人間に存在を与えながらかわり続け共におられるお方であることを宣言なさいます。また、民が偶像礼拝に落ちいり主を裏切った直後に、「『主、主、あわれみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す者』(出エジプト34・6―7)と明かされています。わたしたちは「イエス・キリストは、御父のいつくしみのみ顔」であることを信じています。「御子を見るものは父を見るのです(ヨハネ14・9参照)。ナザレのイエスは、そのことばと行い、そして全人格を通して、神のいつくしみを明らかになさいます(勅書1参照)。

7. いつくしみへの立ち返りの緊急性

なぜ今、わたしたちがこの「いつくしみのみ顔」に出会うべきなのでしょう。

二十一世紀は、第二バチカン公会議『現代世界憲章』が、「今日、人類はその歴史の新しい時代に入っており、深刻かつ急激な変化が次第に全世界に広まりつつある」(『現代世界憲章』4―10参照)と認識した新しい人類の時代です。

公会議が「新しい時代」という意味が目に見える形で一つのグラフになっていきます。約二十万余年かけて、細々と増え続けていたホモサピエンスの人口が産業革命後、急上昇し、現在(二〇一六年九月)七十三億四千万人と言われています。それは、例えますと、ここにお

られる百人近い人々に、急に五倍の人が加わる状況です。すると環境は全く変わります。そして、共に生きるために必要な措置を講じなければならなくなります。こういうことが地球上で起こっています。すべては飛躍的に進歩してきた科学技術の発展と連動しています。

産業革命以来の世界的な科学技術の飛躍的な発展と、急激な人口増加に伴い、地球環境が激変して危機的状況に直面している現在、教皇フランシスコは二〇一五年一〇月、「いつくしみの特別聖年」公布に先立って、回勅『ラウダート・シ』をもって人類家族が「ともに暮らす家（地球）を大切にす」ために緊急課題に取り組まなければならないことを全世界に呼びかけました。「わたしたちは、後続する世代の人々に、今成長しつつある子どもたちに、どのような世界を残そうとするのでしょうか」（教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ』（二〇一五年五月二十四日）160 [Laudato si' De Communi Domo Colenda]）と問いかけます。

このような時代に、競争原理や能力至上主義的弱肉強食の原理から脱して、すべての人の存在の根であり基盤である神のいつくしみの顔を改めて探し、人々が「天の父がいつくしみ深いように、お互いについていつくしみ深くあること」へとすべての人々を招きます。「教会は、一刻を争うほど緊急に、神のいつくしみを告げる必要性があると強く感じています」と訴える教皇フランシスコは、次の祈りをもってこの勅書を結んでいます。

「教会が、いつくしみを注ぐことを絶やさず、慰めとゆるしをもってつねに忍耐強くいられますように。すべての人の声となり、信頼をもってたゆむことなくこう繰り返せませうように。『主よ、思い起こしてください。あなたのとこしえのあわれみといつくしみを』（詩編25・6）」（勅書25）

こうした急速な時代の変動の中で、人々が立ち返る存在基盤としての神ご自身は、いつくしみ深く、あわれみ深く、寛容にかかわってくださいるお方です。



第二部 対談 質疑応答「会場からの質問を受けて」

〔司会進行 宮下良平〔諸宗教部門実務責任者〕、高山貞美〔諸宗教部門委員〕〕

このシンポジウムは神社やお寺の信者たちに伝えられていますか。関心を持たれていますか。

宮下

諸宗教部門としてはチラシを作成し、金沢市内の各寺社にお送りし、ご案内させていただいております。そうした経緯で、今日初めてここにお越しくださった方もいらっしゃるのではないかと思います。他に「どうして十字架を本尊としているのですか。痛く辛い状態をみるのは哀れな感じなのですが、それでどうして救われるのですか」という質問をいただきました。この質問につきましては、中川神父様からお答えいただきましたと思います。

中川

一番、核心をついた質問であると思います。カトリック教会は十字架をシンボルとしてきました。今では、日本でも多くの人が十字架のしるしをアクセサリーとしても身に着けています。しかし、これは今の日本の文脈で言うところ、絞首刑の姿を身に着けているようなグロテスクなことです。

今日のテーマとつながるんですけれども、結局、キリスト教の理解の中で、十字架は愛である神が人間によって殺されたしるしです。それは愛を否定して自己中心的に生きようとするわたしたちの生きざまの象徴です。しかし、同時に、十字架は、自分を殺す人のために死んで贖いをする神の絶対的な愛のしるしです。神はご自分が殺されながらも、殺す人たちを支えながら関わりつづけ、赦しつづける存在であることのしるしです。「神はひとり子を与えるほど世を愛された」という言

葉の見えるお姿です。この神の愛を十字架の中にずっと見てきたのだと思います。十字架を仰ぎ見る生き方とは、ここまで赦され、愛されているものとして神と共に、人を愛することへの招きがあります。イエスと共に、自分が赦されているように人を赦し、いつくみ、あわれむことへの招きです。そういう意味で、キリストの教会において、十字架は自分とその生き方を振り返らせる印となっているのではないかと思います。と同時に、十字架は、すべての人が避けては通れない人生の苦しみの中で、わたしたちを決して一人にはしておかれない、神のあわれみの同伴の印です。

宮下 折角ですので、佐竹先生、三橋先生にもご本尊について少しお話をいただければと思います。

佐竹

仏教でご本尊という場合は、仏教はお釈迦様すなわちゴータマ・シッタールタという人が悟りを開いてはじまったということで、お釈迦様を教主として中心にしているのが普通だと思います。ところが、浄土真宗なんかは阿弥陀如来をご本尊としています。つまり、阿弥陀如来というのは、人間ではなくお釈迦様が悟った内容の真実の法そのものを阿弥陀如来という。先ほども言いましたように、限りのない智慧、限らない慈悲ですね。それがお釈迦様をも悟らせたのでありますから、釈迦が帰依した真実の法を本尊とする、本当に尊きこととする。「もの」ではなく、「こと」とするんです。その阿弥陀というのは、仏像の表現ではお釈迦様の姿に似せて、人間のように表現して、そして周りに光の線があります。暇なときに数えていただきたいのですが、四十八の光、四十八の願いなんです。つまり、それは人間ではなくて、お釈迦様をも悟らせた真実の内容というものを阿弥陀という。親鸞さんなんかはお釈迦様にも教えられたけれども、お釈迦様を含めてあらゆるものがこの真実に出会って歩んでいくので、阿弥陀如来を本尊とする。これが浄土真宗、浄土宗の一般的なご本尊です。誠に尊きこととする―「もの」ではなく「こと」、品物でも人間でもありません。

仏教では仏・菩薩などの彫像や絵像、あるいは曼荼羅や名号などを「ご本尊」と称して礼拝の対象としていますが、神道には「ご本尊」という言葉がありません。神道の礼拝の対象である神は神霊ですので、肉眼で見ることができません。神社の本殿の内陣に「ご神体（御霊代・御正体とも）」が奉安してあります。「ご神体」は鏡や剣、玉、神像、本地仏、弓、矢、御幣など様々で、時には山、瀧、岩石などのような自然物の場合もあります。

具体的に例を挙げて説明しますと、最も有名な伊勢の皇大神宮、一般には内宮と言っておりませんが、ここには天照大神が祀られています。これを「ご祭神」と言います。また正殿（本殿）内には八咫鏡が奉斎してあり、これが「ご神体」ですが、神宮では「御霊代」と称しています。この「御霊代」である八咫鏡とは天照大神の御魂が依り憑く対象物であります。もう少し説明しますと、八咫鏡は御樋代という器の中に納められており、さらに御樋代は御船代という船形の器に納められています。このように嚴重でありますので、「御霊代」はどなたも見ることができません。これは他の神社も同じことで、「ご神体」は見えてはならないことになっております。

また、先ほど自然物が「ご神体」として崇拜されていると言いました。有名なのは熊野の那智の滝ですが、よく見てみますと、これは自然物である滝を崇拜しているのではなく、神霊が那智の滝という特別な滝に憑依しているのであり、要するに神霊を崇拜していることとなります。つまり神は自然物に憑依しますが、自然物は神になることができないのです。しばしば神道は自然崇拜であるとの説明を耳にしますが、これはあまりにも短絡的な考えと言わざるを得ません。

ところで、明治の神仏分離令により、本殿内に「ご神体」として奉斎されていた神像や本地仏が外に出され、これに代わって御幣が奉斎されました。御幣は幣帛の一種で、元来は神に奉獻するものの総称でしたが、現在は神の依代、すなわち神霊が依り憑く対象物であるとして、これに向かつて拝礼をする人もいます。したがって、御幣は本殿の前に立ててあるのが一般的ですが、社殿の規

模により様々であり、中には幣殿へいでんないし拜殿はいでんの奥に立ててある神社もあります。

その御幣ごへいの解釈は様々であり、一筋縄ではいきませんが、わたしは神の衣服でないかと思えます。先ほども言いましたように、御幣ごへいは幣帛へいはくの一種であり、漢和辞書には「幣は帛なり」と説明しています。帛とは絹きぬのことで衣服の原料になるものです。また衣も「きぬ」と言います。そこで、注意されるのは、御幣ごへいを時たま新しく作り変えていることです。その理由は神がご自分の衣服に人間の犯した罪を付着させるからです。そのことにより神の清浄な衣服は罪の衣服へと変化いたします。再び清浄な衣服を取り戻すために、神の衣服である御幣を新しく作り変えるのだと思います。もとより神は清浄な存在ですが、それだけに不浄な身となるのです。つまり、神道で「ご本尊」のように礼拝している御幣は、神の衣服であり、神はその衣服に人間の犯した罪や穢れを付着させ、代わりに背負わせて、川などに流されていくのです。したがって、このような御幣あがものを贖物あがもの・御贖物あがものと称しています。ここに神道の神々の大悲代受苦があります。換言すれば、「いつくしみ」「あわれみ」と言えましょう。

心の平安についてお尋ねします。自分はどうしようもなく至らない者であり、罪深い者であると思うということは、現世では心の平安は得られないということでしょうか。それとも、如来あるいは神がいつも一緒にいてくださると思うことが心の平安なのでしょう。あるいは来世でこそ平安が得られるのでしょうか。何に幸福を感じればよいのでしょうか。

中川 何年か前にドミニコ修道会の総長がその著作の中で、スコラ神学の代表的神学者で『神学大全』を成した、知の巨人ともいわれる聖トマス・アクィナス教会博士について、「彼の生涯を導いたもの

はか」と自問し、「それは神への無知であった」と記していました。結果から見ても、何かを完成させたようにうかがえる人の生き様は、むしろそれにうえ渴きつづける生涯です。自分の修道会の代表的な聖人たちの生涯を導いたものは何であったのだろうかと考えると、例えば、神の現存を深く生きた十字架のヨハネの生涯を導いたものは、「神の不在であった」といえると思います。それは、わたしは神にまだ出会っていない、神を捜さざるを得ない、神に満たされていないという強烈な不在感です。また、聖テレジアという人も、「あなたは神への祈りに進歩しているかどうか知りたいですか」と問いながら、「自分こそが皆の中で一番悪い者と思ひ、またそう思っているということを行為で示して、ほかの方々の進歩と利益のお役に立っているならばそれが進歩の印です」(『完徳の道』一七章)といひます。おそらく、「心の平安」も、何も心配がない、何も問題ないということではなく、絶えず神を探し求めながらイエスが人々に仕えたように仕え、平和のために働き続けることの中に、平安が宿るのではないかと思ひます。先ほど先生がおっしゃったように、やってみなければ自分の至らなさはわからない。神を探して生きていくときに、むしろ不安になったり、足りなかったり、自分はダメだなと落ち込みながら生きていくならば、平安を生きている印なのかもしれない。

佐竹

仏教中国に伝来して、四〇〇年くらいに漢文のお経が成立しています。そのときに、例えば、中国のずっと西のインドに近いところで、インド系の父と中国系の母の間に生まれた鳩摩羅什という人がいまして、小さいときからお母さんに連れられていろんなお寺でお話を聞いて神童と言われたいました。長安の都から、そんな優れた子がいるならすぐに連れてこいと言われ、数千人の兵隊がかけつけて、その鳩摩羅什を逮捕して、国を滅ぼして長安へ戻ってくる。敦煌の手前まで来たときに、連れてこいと言っていた国王が殺されたんです。そうしたら、連れに行つた呂光という將軍

は都に上れなくなり、武威という町で十七年間、鳩摩羅什を捕虜にしたんです。無駄な日を過ごさず
んです。ところがその將軍も死んでしまつて、結局、都から僧侶たちが探しにきて、十七年目にし
てようやく鳩摩羅什を長安に連れてきて、鳩摩羅什が覚えたお経を一気に中国語に翻訳したとい
うのです。そういうわけで、所々記憶に違いがあったりして、インドの伝文とちよつと違ふところ
あるということなんです。何百というお経を中国語に翻訳して、その中で「極楽」という表現を使つ
ているんです。ところが、年代ははっきりしないんですけれども、インドにいた天親菩薩てんじんという方
の『浄土論』という資料に載せてあるんですが、その人の書いたものが中国語に翻訳されたとき
に、それが「安楽」という言葉になった。それで、「お浄土」＝「安楽」というのが一般化し、定
着しました。「極楽」は普通の楽を超えているということ。中国人でも新しい言葉として扱って
います。いずれにしても、楽の極みであり、人間の苦しみがなくなった状態である「安楽」というの
が「浄土」ということです。先ほどからお話しを聞いておきますと、キリスト教の中でも同じよう
な問題をずっと抱えておられるんだなと思ひました。つまり、現実はいつでも心が一つになる、心
が真反対に忘れて落ち込んだりと、そういう現実の中にあるわたしたちにとつて、仏に出会うとい
うことは死んでから出会うのではない。いつしか中国では三途の川を渡つて極楽へ行くという考え
が出てきました。今の日本人でも、大方の人が三途の川は死んでから渡るもので、その川を渡つて
極楽へ行くと思つている。この考え方も中国から入ってきたのですが、日本でも一〇〇〇年頃に定
着します。今でも、三途の川とは死後の世界ですが、でも親鸞さんの歌には何度も三途という言葉
が出てくるんです。三途とは人間の現実や苦しみです。どうしようもない、辛い、争いを起こす心、
そういうのを三途と言ふんです。これは生きている、現状のことを言うのであります。つまり、わ
たくしたち一人ひとりが仏を信しても尚且つ、そういう争いが引き起こされたり、信じていても思
う通りにならないと嘆いみたり……。ではそういう中で何が大切なのか。善導という六〇〇年代の中

国の人で、一人で中国を抜け出してインドに渡った人ですけれども、その人曰く、一つは、如來の「法」を深くいただくことが大事なので、教え信じよ。でももう一つは、わが身を知るということが仏の光に出会うことなので、わが身を信じよと。わが身のことを「機」という言葉で表します。

「機法二種深信」という言葉があります。つまり、教えをいただくと同時に、教えによって出会うわが身に出会う。「機法二種深信」というのは、教えをどれだけ信じてべらべら喋っても、普段の生活がダメならそれは本当の信心にならないということ。つまり、教えを乞うて尚且つ、崩れていくようなわが身だということに常に気づかされていく世界。機法二種深信によって信心が成就するということ。そういう気づく世界、「ああ、そうだ」と己に出会う世界が、実は如來の深信である世界です。だから、生きている間はもう二度と迷いの心を起こさないとこは、そりゃあるかもしれないけれど、当然わたくしにとってはありえない。でも、いつでもそのことに実は気づかされて、呼び返されて、また戻っていく世界から離れる。これを親鸞さんは「安養浄土」と言っています。親鸞上人の著作を全部検索しますと、六対四で「安樂」のことを「安養」としている。ところが、親鸞さんは、ほとんど先生たちの引用を使いますので、引用は全部「安樂」です。だけど親鸞さんが自分で語るときには「安養」と言っただけです。つまり、あえて中国では「浄土」を「安樂」「安養」と言うんだと。両方使われているんですが、圧倒的に「安樂」を使う。しかし、親鸞上人が自分で語るときは圧倒的に「安養」を使う。つまり、わたくしたちの生活はいつでも養われているということ。親鸞上人がおっしゃっているのは、変な心が起きるからダメなんじゃない、起きたことが実は、真実に出会う縁となつて呼び返されて、歩んでいくんだということです。ですから、機法二種深信ということと、わたくしたちの歩みは「安養浄土」に触れている。いつでも我が起ることがあれば、私のせいだということに気づく心がなければ、それは離れていく。しかし、我に縛られることによって気づかされる世界があれば、育てられていく世界がある。ですから、最初に親鸞上

三橋

人が言われた言葉ですけれども、「釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり。」（『教行信証・総序』）つまりこれは、煩惱が起きて、起きて、そのことをご縁としていつでも如来真実に呼び返されていく歩みが我々の中にあるんですよ、そのことは忘れないでくださいということです。

神道はどちらかと言えば、来世より現世を重視する宗教です。そのことは十六世紀、戦国時代の日本にやってきたイエズス会の宣教師ルイス・フロイスも気づいていたのであり、彼は一五八五年に加津佐でまとめた『日欧文化比較』第五章27で「日本人は神々 Camis に現世の幸福を求めると書いています。つまり、今を「平安」に生きることが大切であると言います。これは神道の歴史観の一つであり、その今とは神代から継承されてきた今であり、未来に続く永遠の今でもあります。これを「中今」と言います。

さて、「平安」という語は、神前で唱える祝詞にも「平たいらけく安やすらけく」とか「安やす国と平たいけく」などとしばしば出てきます。祝詞の根本にあるのは、先ほども話題にした言霊信仰です。ある言葉を口にしなると、その言葉どおりのことが実現するとの信仰です。したがって、「心が平安でありますように」と口に出して神に祈れば、その言葉の内容が実現すると信じられました。

それでは「平安」とは何かという、「よくもなく、悪くもない」ということです。言い換えますと、「変わりのないこと」です。日本人は日常の御挨拶の中でも「お変わりありませんか」と言います。この普段と変わりのない平凡な日々が「平安」ということなのです。

神社にお参りしますと「おみくじ」というものがあります。その順番や内容は神社によって様々ですが、一般的には「大吉・中吉・小吉・吉・末吉・凶・大凶」の七種類であり、この順で運勢がいいと言われていますけれども、わたしは必ずしもそのように考えておりません。たとえ大吉が出て、いつまた大凶になるかもしれないのであり、また大凶が出て悲観することはないと思いま

す。いつまた大吉になるかもしれないからです。「おみくじ」は神さまからのお告げですから、それを素直に受け止めることが大切です。神さまは人間を奈落の底へ突き落とそうなどとは微塵もお考えになつておられないという堅固な信仰を持つべきです。それどころか、前に述べたように、「いつくしみ」と「あわれみ」の心をもつて、ご自分を犠牲にされてもわたくしども人間を救つてくださる方であるからです。

なお、「心の平安」に関して言えば、今はほとんど見られなくなりましたが、古い時代の「おみくじ」に「平」というのがありました。今も埼玉県の氷川神社、京都の下鴨神社・石清水八幡宮、大阪の住吉大社などにあると聞いています。これは先ほども言いましたように「よくもなく、悪くもない」ということ、「平穩で穏やかな今の状態がよい」ということです。それが日本人の「お変わりありませんか」という挨拶言葉の根底にあり、平凡ですが「心の平安」の最も大切なところだと思えます。

「心の平安」を保つためには神さまから護られていなければなりません。千年前の大殿祭という古い祝詞に「奇し護言」という語が見えます。「奇し」とは「神秘な」という意味です。「護」は「齋い」と同じですが、現在では「祝い」と表記します。もとの意味は「神さまが人間の平安をお護りになる」ということです。

そのためには、わたしたちは常に神と共にいなければなりません。そこで考え出されたのが「お守り」です。神社に行きますと授与所に「肌守り」という「お守り」があります。人々はそれを受けて肌身離さず持ち歩くのです。ただ、シャワーを浴びたりするようなどきなどは「肌守り」といっても肌から離さねばなりません。そこで飲み込むお守りが案出されたのです。例えば、安産の神で有名な水天宮から出されるお守りは、水の中に溶かして、それを飲み込むのです。体内に入りますので、入浴中でも神と共にいることになり、神から護られていることになります。

これに関して補足しておきたいのは、お正月に神棚に鏡餅を供え、それを下げてきて家族がそろつ

て食べるというしきたりのあることです。鏡餅はその年の神さま、すなわち年神さまのシンボルと言われております。だから、鏡餅を食べるのは、その年神さまを体内に入れ、常に年神さまと共にいることを意味し、そのことによりその一年間、年神さまに心身の平安を護っていただくという意味があります。また、鏡餅はその年の魂（年玉）とも言われます。鹿児島県薩摩川内市の下甕島に伝わるトシドンという正月行事では、鬼のような顔の年神が来訪してこられて家々を回り、子どもたちに「歳餅」という餅を与えます。この餅を貰わないと歳を取ることができないと言われており、お年玉の原型とされています。

また、この石川県で例を挙げますと、能登の輪島市にある重蔵神社の如月祭が留意されます。如月と言いますが、現在は三月に行われています。この祭りでは氏子が御饌米餅という餅を食べ、また血の色をしたお霊酒という酒を飲み、さらに黒髪に似せた神馬藻というワカメを食べます。心をひかれるのは、その御餅を神さまのお身体であると言い、またお酒は神さまの血であり、ワカメは神さまの髪の毛であると言って食べていることです。つまり、神さまの身体を食べ、血を飲むというのは、カトリック教会でのミサと似ているようにも思います。司祭はパンを取り「これはわたしの体である」と言い、またぶどう酒を「これはわたしの血」と言われます。このようなミサにあずかることによりキリスト信者はキリストと一つに結ばれると言われており、そこに心の平安が得られるのであります。それが類似したことが神道の祭りにも見られることを皆さんにも知っていただきたいのです。このような祭りは国家神道により廃止されますが、それでもまだ各地で行われていること、特に祇園信仰の神社では普遍的な祭りであったようであります。

今回のテーマである「諸宗教における日本人の心」という点について。日本人の心の中に、いつくしみやあわれみ、慈悲の心がどのようにあるのでしょうか。違う宗教を信仰しながら、同じ日本人としてどのような共通点があるのでしょうか。

中川 「日本人の心」ということをカトリック世界から語ろうとすると、歴史の浅さを感じます。わたくしたち日本人は、一五〇年前、明治維新の近代化の中で、西洋文化と共にキリスト教の第二次宣教を受けてキリスト教と出会ったわけです。先ほども申し上げたように、この一五〇年は激動の歴史であり、人間観も大きく変わってきたと思います。初期のキリスト教にとって一五〇年というとき、キリスト教がローマに伝わって、まだ地下教会の時代です。わたしはキリスト教の精神文化やその用語さえもいまだ日本の文化の中に受肉したとは思いません。愛、罪、いつくしみ、あわれみという翻訳の言葉も、この中身はいったいどういう事なのか少々戸惑いながら体験しています。ヨーロッパのラテン語で自由にキリストのことを語るようになるのに、アウグスティヌス（三五四年―四三〇年）の時代まで待たなければならなかったと思います。四〇〇年くらいかかります。そこには、四百年生き抜いた人たちの心の体験があって、その中から言語化されていきます。わたしたちの場合、翻訳語の限界をいつも感じています。「いつくしみ」という言葉にしても、つい最近まで「Misericordia」を「あわれみ」と訳していました。「あわれみ」と言うと、「みじめな自分」とか、「どうしようもない」とか、上から一方的に言われているように感じるが、他方「いつくしみ」には何か神との豊かな交流を感じるといふ意見もあり、賛否両論あります。今回のテーマは「慈悲」と訳されましたが、個人的にはふさわしいと思います。

ヨーロッパで、イエスを Misericordia と体験したことを日本の文化の中でふさわしい言葉に置き

換えられていくのに相当時間がかかるのだろと思います。ただ今回この「いつくしみとあわれみ」ということを思い巡らしながら、ずっと気にかかるのは、「いつくしみ」と「正義」がどう調和するのかということです。教皇の勅書も、「いつくしみ」は決して正義を蔑ろにしているわけではないが、その本源は「いつくしみ」であるという書き方です。「いつくしみを生きる」ということは、神ご自身の心―先ほど三橋先生がおっしゃっていたように、食べさせてもらって、中に入れていただいて、神ご自身と一緒に生まれてくる在り方であろう思います。カトリック教会そのものが、現代改めて、「いつくしみのみ顔」を探し、神の真実を探し直し、出会いなおすことの必要を感じています。

宮下 「具体的な例はありますか？」という質問もいくつかいただいています。いかがでしょうか。

中川 今回ここで話しさせていただきます、両先生のお話を伺いながら、キリスト教の世界が探してきたものは、このように体験され、捉え、表現できるのだと気づかされることが多くありました。日本でのキリスト教体験は遡っても一五〇年ほどですが、日本で千年、二千年単位で体験しながら、味わって伝えてきたものの中に、わたしたちキリスト者が探しているものの本質を探る豊かな光を見出すことが出来ると思います。

佐竹 わたしは金沢の別院で年に一、二度お話をしております。今日お見えの中で、そのときに顔を出しておられた方も何人かおられますので、何度かご紹介したのですが、今日こういう所は初めてです。紹介させていただきまます。金沢に五郎島というサツマイモの産地があります。今でもサツマイモを作っておられるお家で、一名前を出していいかわかりませんが、音地さんというお家があ

ります。この音地さんの所に、四、五年前に、昭和十年生まれで、七十何歳まで生きて亡くなられた音地修一さんという方がおられました。その方は昭和二十五年、ちょうど十五歳くらいから歩行が困難になり、昭和二十七年くらいには完全に寝たきりになってしまったのです。ですから、中学校までは出たんだけれども、それ以降はほとんど寝たきりのままで、六十年ほど生きていたという方です。その方は、自分が長男なのに寝たきりになってしまったので、はじめは母親、そしてやがては妹夫婦に囲まれながら生涯を送られたわけですが、こんな自分なんか死んでしまった方がどれだけこの家のためになるか、自分も楽になるかと。死ぬことだけを考えて、誰とも会わず、閉じこもって悶悶とした生涯を過ごっておられた。テレビを見ることがだけが楽しみで、日曜日の朝NHKを見ていたときに、「こころの時代」という番組をやっていました。そのときに、今は退職なさった梅原猛先生という方が京都におられて、京都市立芸術大学の学長になられ、京都大学で哲学を教えていらつしゃいました。が、若いときに『親鸞』という本を出されました。その方がNHKに出られて、「親鸞」という方は、仏のはたらき、如来他力ということを説かれた。如来回向。慈悲というものは如来のはたらきによってわたしたちに溶け込むんだ」という親鸞さんの歌があることを紹介されました。『教行信証』の一番はじめには「二種の回向有り」とあります。回向というものが仏のはたらきだということを言われて、「回向という仏のはたらきはどこにあるのか」と音地さんはその放送を聞きながら日々を過ごしているうちに、次のような歌を詠まれます。「吾が葵えし 手をとり洗う妹の ささくれし手に 労をしるばる」まだ小学生だった妹が、ずっと下の世話をし、三度三度の食事の準備をきちんと運んでくれる。また食事が済んだら、その孫が「錠剤を運びし もみじの手…」、「おじちゃん、お薬」と言って、口の中に錠剤を入れてくれる。この孫が、妹が便器を外して洗いにいくとすると「便器洗うの手伝う」と言って手伝ってくれる。それが嬉しいやら、恥ずかしいやら、悲しいやらという複雑な気持ちを歌に詠んだ。いつのまにかしわだらけになった妹の手、ま

だ何もわからないけど便器を洗う孫の手、そして夏になったら暑いからといって、膝や腰が痛いのにシャワー室までおぶっていつてシャワーを掛けてくれる妹の息子。「如来の回向とは理屈でなく、わたしの家族の手であり、背中であり、足である。如来のはたらきとは自分の周りのこんなところにあるんだ」と気づいてから、この人は変わったんです。その歌を作ってから亡くなるまで、存命中に詩集を出されました。その詩集の最後には「二種回向 還りて我を 助けんや 我のまわりのやさしき人らは」という歌があります。「還りて我を」というのは、浄土から出てきてわたくしのために働いてくださるということ。この歌の説明として書かれているのは、「親鸞聖人は、自力回向は我々の成し得ないところと解して、ことごとく他力回向とし、浄土に生まれる姿も往生も、さらに娑婆世界に帰りて修行する姿も共に、阿弥陀如来の凡夫に回向されるものと解釈する」ということです。つまり、生活の中で行き詰って死んだ方がましだとしか思えないその思考や心に、いつしか自分の下の世話までし、しわだらけになった妹の手、これも如来回向なんだ。孫のあどけない手がいつも薬を飲ませてくれる、これも如来回向の手だ。妹の息子も、背中が痛い中でわたしをおんぶしてくれる、これも如来回向の背中なんだ。こういうことを知って、この方は亡くなられたわけです。そういうことを思うと、人間は明日を背負って生きるんですけれども、どんなにしても上手いかな、この困難な行き詰りの中に必ず、気づいてみれば如来のはらたきが至るところに届いているとわかるんです。そういうことに気づくということ、如来のいつくしみ―如来が我々をいつくしんでくださるということに、正にわたしたちが気づいて、「ああ、そうか」と頷いたときに、命が歩まれる世界がすでにわたしの上にあると気づくのです。こういう見事なメッセージを残してくださった方がいらっしやいます。いつも人を生かしてくれる、そういう如来のはたらきに気づいていく世界が、我々に与えられるのだということです。そういう意味では、いつくしみ合い、いつくしみを与え合うことを、わたしたちが仏のはたらきとしていただいているということです。

神道では「あわれみ」という言葉をあまり使いませんが、言葉がないからといって「あわれみ」の心がないということにはなりません。むしろその逆であり、当然ながら神道にも「あわれみ」の心があります。一例を挙げますと、「病む子ほどいとし可愛の親心 忘るる暇のなきぞ不可思議」という道歌があります。最後の「不可思議」を「悲しき」とした本もあります。これは教派神道十三派の一つ、禊教教祖の井上正鐵の歌とされていますが、はたして正鐵がお作りになったのか、もとの歌があるのかはよくわかりませんが、大切なのは、この歌には親が子に対する「あわれみ」、すなわち慈悲の心が詠まれていることです。

そこで、以下に私事を話すことをお許しください。今でもハッキリと覚えているのですが、小学五年の十月の出来事でした。わが家と隣の家との間に狭い空地がありました。学校から帰ると、わたしはその空地でボール投げに興じたものでした。ところが、母はそこでのボール投げだけはやめなさいと繰り返し忠告しました。ボールで隣の家のガラスを割るようなことがあつては一大事と案じてのことでした。しかし、わたしは母の忠告にそむいてボール投げをやめました。ある日のこと、ボールが大きく外れて、隣の家のトイレのガラスを割ってしまいました。運悪く、ちょうど隣のおばさんが用を足していたところでした。「コラあー！」と物凄い怒鳴り声が聞こえました。そのとき、わたしはこれがほんとのウンの尽きだと思いました（笑）。その物音を聞いた母は家から飛び出してきて、わたしの手をとり、すぐさま隣へお詫びに行きました。母はわたしの過ちを自分犯したかのように、ただひたすら謝っていました。このまま家に帰ると、間違ひなく大声で叱られ、おまけに買ってもらったばかりの金属バットでぶたれるに違いないと思いました。ところが、母は叱るところか、黙ってわたしを抱きしめてくれました。母の大粒の涙がわたしの頬に流れ落ちてきました。六十年経った今も、あのとときの母の涙を忘れることがありません。母は声も出せないほど辛く悲しかったのであり、そして深くわたしを愛していたことがわかります。いつそのこと、

あのとき、母に思い切りバットで殴られていた方が楽だったと思うことがあります。

「いづくしみ」「あわれみ」そして「慈悲」は、そこに苦しみや悲しみを感じたとき、初めて本物になるのだということを、母はわたしに示してくれました。大学で国文学を専攻して「阿弥陀胸割あみだのむねわり」という本地物ほんちものを読みました。ある娘が他人の難病を治すために、自分の生き肝をさげようとすると、阿弥陀が身代わりになって、その胸から血を流すという物語です。母は阿弥陀さんの熱心な信者でしたので、この物語を読みながら、母のことが思い出されました。

今思いつくことで結構ですので、先生方が皆さんに読んでもらいたい本や、ご自身が大切にしていられたいことなどございましたら、ご紹介いただければと思います。

中川

わたしが最近、手元に置いている本はシモーヌ・ヴェイユとか、日本の哲学者の鷺田清一さんです。

この人たちの共通点を「物事に対して注意深い心で生きていくこと」と理解しています。鷺田清一さんは大阪大学の元学長で、今は朝日新聞で「折々のことば」を連載しておられます。この先生の哲学の根本には、物事に注意深く聴く姿勢があると思います。「聴く力」が、生きることの力になっているというものです。シモーヌ・ヴェイユは「物事に対して注意深い心は、その人の心を本質へ向け、最終的には神へ向けていく」、祈るということは注意深くあること言います。この目まぐるしく変わっていく時代に、自分について、この生きていく世界の根底にあるものについて、どこまで注意深くあるかが人生を開いていくのではないかと思っています。鷺田清一さん、シモーヌ・ヴェイユの本の中に、生きることについて大事なヒントがあると思っています。

佐竹

わたしが影響を受けた先生で、宮城巖いわさんという京都の方がいらっしやいます。その先生の選集を十七巻、七年間かかりまして発行しました。その先生がおっしゃったことはいろいろありますが、今でも思い出すのは「仏を念ずるは、仏に念じられている身を発見すること」だということです。最近宗教というと、これを信じたらガンが治りますとか、これを信じたらお金が入りますとか、そういう取引というより、人間の本质は本当にそうなんですけど……。実はわたしが仏を念じるんじゃない、仏に念じられている身なんだということに出会うことが、人間にとって本当に必要なことだということなんです。その十七巻は大量ですけれども、宮城先生は生涯を通して教えてくださっていたことを大事にしたいなと思っております。

三橋

経営の神様と呼ばれた松下幸之助さんは、従業員に「松下電器は何をつくるか」と尋ねられたら、松下電器は人をつくるところでございます。併せて電気器具もつくっております。こうお答えしなさい」と言われました。その松下翁に、わたしは若い頃、人間形成に関して、様々なことを教えられました。その一つを紹介いたします。それは「長者の万灯より貧者の一灯」ということです。これは「阿闍世王授決経あじやせおうじけつけつぎょう」に見える故事に基づいた言葉です。その内容は、古代インドの阿闍世あじやせという王さまが、宮殿から祇園精舎への帰り道、万灯をともしましたが、それらは油が尽きて消えたのです。ところが、貧乏な一人の老女が真心からささげた一灯は終夜消えなかったというのです。

もう一つは、今日のテーマに関する大切な言葉をあげてみたいと思います。それは著名な仏教学者・中村元先生の訳された「ブツダのことは」です。わたしは恩師の西田長男先生から紹介されて中村先生から様々なことを学びました。その中村先生の墓誌に刻まれている「ブツダのことは」を挙げておくことにいたします。

慈しみ

一切の生きとし生けるものは

幸福であれ 安穩であれ 安樂であれ

一切の生きとし生けるものは幸であれ

何びとも他人を欺いては ならない

たといどこにあつても

他人を軽んじてはならない

互いに他人に苦痛を与える

ことを望んではならない

この慈しみの心づかいを

しっかりと たもて

本日の最初に述べたことの繰り返しになりますが、このような諸宗教の対話に欠くことができないのは、この「慈しみ」であります。世界には様々な民族が存在し、それぞれに宗教や思想が異なっております。信ずる対象が違ふのですから、互いにおつかることとなります。そのようなとき、ここに挙げた「慈しみ」が大切となります。つまり、「他人を欺いてはならない」「他人を軽んじてはならない」「互いに他人に苦痛を与えることを望んではならない」「これらの「慈しみ」の心づかいを、しっかりと保つことが最も重要なことであると思ひます。

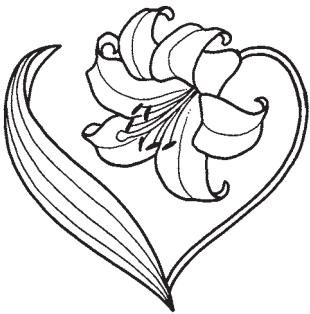
閉会あいさつ

宮原 良治（諸宗教部門担当司教）

半日に及ぶシンポジウムでしたけれども、皆様いかがでしたでしょうか。最初に、このシンポジウムを主催している日本カトリック司教協議会諸宗教部門の責任司教をしております岡田大司教様から「このシンポジウムを通して、参加者が参加してよかったなと思っていただけだと大変ありがたい」と、そういった祈りや願いを込めながら挨拶をいたしました。恐らく、よかったなと思っていただけだと思います。先ほど三橋先生がおっしゃられた「平」、平凡がいいですよということ。よくもなく、悪くもなくという在り方ですね。でも、本当の平凡というものを貫くとするならば、そこに非凡さが隠されているんじゃないかな、という気がします。そういった意味で「平凡を貫く」ということは大切なかもしれません。

今日、三名の講師の方のお話を通して、「いつくしみ」「あわれみ」「慈悲」という言葉の意味は何なのかということ、またそれを通して、わたしたちがどのように生きてきたのか、それが文化になり、文明になってきたのだと学びました。そして大事なものは、わたしたちがこれからの社会の中で生かされながら、それをどう受け止め、活かしていくかについてお話しをされたのではないかなと思います。特に最後の、これからの社会に対して、「いつくしみ」「あわれみ」「慈悲」を受け止めようかというときに、中川神父様は一年、五年、十年などではなく、二百万年など長い時間の中で、しかも銀河系から地球を見るような壮大なスケールでこれからの社会の動きを見つめる必要があるということ、この「いつくしみ」「あわれみ」「慈悲」を切り口としてお話をいただき、本当に参考になりました。ありがとうございます。今日お話しくださった三名の方に、改めて御礼を申し上げます。

そして、このシンポジウムの会場として、このすばらしい教会を提供してくださいました主任司祭のチ
ブリアノ神父様をはじめ、信徒の皆様にも心より感謝を申し上げます。朝早くから信徒の皆様が手伝って
くださり、すてきなお花も生けてくださいました。また、椅子や機材の準備など、目に見えないところで
このシンポジウムを支えてくださり、本当にありがたいことだと思えます。そして何よりも、貴重なお時
間を割いて、このシンポジウムに参加してくださいました皆様に感謝とお礼を申し上げます。
本当にありがとうございます。



パネリスト紹介

三橋 健 (神道)

1939年生まれ。國學院大學文学部卒業、同大学院文学研究科神道学専攻博士課程を修了。神道学博士。1971年から74年まで、ポルトガルのコインブラ大学へ留学。帰国後、國學院大學講師、助教授を経て教授となり、2010年、定年退職し、現在は同大学院客員教授。なお、1996年に在外研究員としてフランスとイタリアへ派遣され、パリドフィース、グレゴリアン、ナポリ東洋などの各大学で神道に関する講演、講義を行う。
また国内では東洋、上智、駒澤、清泉女子大学などの非常勤講師を務めた。
神道や神社に関する著書多数。

佐竹 通 (真宗大谷派)

1941年生まれ
大谷大学哲学科宗教学卒 (1965)
西谷哲治先生に学ぶ
真宗大谷派宗務所に勤務
出版 教学研究所などを経て退職 (1975)
大谷派専勝寺住職 (1985～2010)
現在住職を退き前任職
その間保護司32年、日中友好協会会員

中川博道 (カトリック)

カルメル修道会司祭
北海道出身
1975年、カルメル修道会入会
1984年、司祭叙階
現在、宇治修道院在住
教皇庁立テレジア大学修士課程修了 (霊性神学)
カルメル修道会修道院長、修練長、管区長、神学院講師 (霊性神学担当) 等を歴任。
現在、聖母女学院短期大学 (京都) 非常勤講師。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障がい者その他の人のために、録音又は拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項によりいっさい自由である。

「いつくしみとあわれみ—慈悲—」2016シンポジウム記録

2017年 8月 4日発行

©カトリック中央協議会2017年

編 者 日本カトリック司教協議会 諸宗教部門

発 行 カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館内

☎03-5632-4411 (代表)

印 刷 株式会社 東伸社